

昭和45年度後期始業講演要旨

—文理学部—

紫式部と宗教

丸山 キヨ子

—序—

「紫式部と宗教」などという大風呂敷をひろげておいたけれども、紫式部ひとつとつみても、その伝記についての詳しい考証など紹介していれば、一時間半位はすぐに終わってしまう。それで、ここでは一応いわれているように、つくり物語としての源氏物語の作者であり、

紫式部家集と紫式部日記とを残した

女性の精神の問題

として、物語を中心に、家集日記を参照しながら、その中に読みとれる範囲での、「紫式部の宗教的志向」というようなものを、考えてみたいと思ったまでである。

周知のように、源氏物語は「もののあはれ」を描いたものだという宣長以来の定説のようなものがある。宣長の「もののあはれ」論は、それはそれで、仏教的、儒教的な側面から功利的に考える、「因果応報の理を現す」ためとか、「勸善懲惡」のためとかいうような、文学作品がめざすものからそれた、実践的な目的の為に書いたとする説を斥けるために、芸術の純粹性をまもり、芸術（文学）としての物語の意味・価値を闡明したものとして、高い価値を認められる業績である。けれども学問的価値というものは、人間のすることとして相対的であることを免れない。一面を強調すると、他の一面をとり落してしまうことがあるもので、源氏物語を虚心に読んでみると、たしかに「あはれ」という言葉は大切に扱われてしかも沢山使われているし、また、「あはれしる人」をよき人として位置づけてはいる、けれども、だからといって、それらの人々が、そこに安住している姿を描いているわけではない。むしろ、「あはれを知る人」が、それゆえに深い苦悩を味わねばならず、それを契機として、最後にはそこを越えるべき姿勢をもつに至る姿が描かれ、しかもその点において、いろいろな問題提起がなされているのをみるのである。

もっとも、今日、源氏物語に、そうした宗教的なものがあることを見ている人がいないではない。しかし、多くは、そのような仏教的なものが描かれているのは、その当時の風俗として、仏教的な行事が反映されているにすぎないとして扱うか、あるいは、行事にまつわるあはれ、例えば出家に際しての別離の悲しみとか、死後の追善供養における追憶の悲しみというような、一段と深い「あはれ」を描くために、仏教的なものが描かれているのだというような意見になっていく。これらは、先にふれた、文学が宗教や道徳のために使われているというのと丁度反対な、文学のために宗教が奉仕しているという形で捉えているので、こうなるとまた問題を感じさせられるのである。そんなわけで今日は、文学における宗教の問題という処まではいかれないけれども具体的に物語に描かれた姿を虚心に見ることによって、作者の考え方を探してみたいと思う。

順序として簡単に紫式部のことにふれておこう。いわゆる平安朝中期、円融天皇の天禄元年は九七〇年で、本年から丁度1,000年前に当る。紫式部はこの970年代に生れている。人によって970年（九州大学今井源衛氏）、973年（早稲田大学岡一男氏）、978年（興謝野晶子氏）と少差はあるが、円融、花山、一条、三条と四代を経て、三条天皇の長和三年、1014年頃没したと思われるので、その生涯は40才余りということになる。自覚的に物を視たり、考えたり出来る年令に該当する時代としては、一条朝三条朝における出来事であり、当時の権力者としての藤原道長が上り坂にあった時に当る。因みにいえば、970年から一年前969年は冷泉天皇の安和2年で、醍醐天皇の皇子源高明が謀反の科で大宰府に左遷されており、これが藤原氏の他氏族排斥の最後の事件であった。以後は藤原氏一門の中での勢力争いが行われるのである。道長一家にこの上ない栄誉をもたらした彰子が生れたのは、式部18才位の時であり、道長の長兄道隆がその全盛時代に思いがけず病没し、次兄道兼がまた七日閔白で急死して、道長に政権が移り、道隆の子、伊周・隆家から全く力を奪ったのは、式部25歳位の時のことであった。けれども、道長が三人の娘を、太皇太后、皇太后、皇后として

この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば
と詠んだのは、紫式部歿後五年のことである。まして62歳の道長が、法成寺の阿弥陀堂で、本尊「阿弥陀如来の御手の糸」を手にかけて死んだのは、それからさらに数年後のことである。

家系は、道長等と同じ北家であるけれども父方母方ともに末流で、やがて結婚した藤原宣孝も、父方のまたいところに当る同族であった。早く母を亡くして、漢学者としての父の膝下で育ち、漢詩文の素養は、父から充分に受けることが出来た。夫宣孝は磊落で、派手好き、物解りのいい人であったようだが、父の役人仲間であり、式部とは17・8才位も年令が違っていた。長保元年（999）結婚、翌年一女（賢子）を設け、順調な家庭生活を踏み出したようであったが、続く長保3年（1,001）宣孝の死にあい、人生の挫折を経験する。後は娘を育てて家庭に在ったらしいが、恐らく、結婚前から書き始めていたと思われる、「源氏物語」を書き続け、その評判によって、道長に見出され、寛弘2年（1,005）頃一条天皇中宮となった彰子の許へ宮仕えに出、亡くなるまで宮仕えをしていたのかどうかは分らないけれども、物語の方は宮仕え後も書き続けて、死ぬまで書いていたであろう、というのが、一応のところである。

源氏物語は、こういう作者の心に孕まれ、續ぎ出された作品であり、家集には、夫宣孝とのやりとりと思われる歌なども収められているが、深い人生観照を思わせる作品も見出され、日記においては、物語作品の鋭い眼が抉出した人生の姿が、厳しい内省と共に語られている。

1

紫式部が、源氏物語の中で、最も心を注いで、懇切に描いた「あはれ知る人」々が、「あはれ」の世界から脱皮してゆく姿をどんな風に扱っているか、その代表的な例として、まず、主人公光る君と、紫上との関係を、とりあげてみよう。光る君の晩年39才の年末から書き出されている若菜上巻、続いて47才位の頃までのことを描いている若菜下巻、それから紫上か病没する御法巻、紫上をそだてた光る君が、思い出の一年を過す幻巻、あたりが考察の手懸りになる。

光る君の女性関係で、紫にとって問題になったのは、権斎院、明石君であった。けれども権は事なくすみ、明石との間柄は、光る君との間に設けられた姫君を、その将来性のためもあるって紫が引取って育てるということになったために、一応の融和に至っていた。けれども、愈々晩年になって思いがけなく迎えられた女三宮との問題から、紫の心のゆらぎは決定的なものになっ

てくる。それは光る君にとっては紫のゆかりとして、やはり「ゆかし」い対象であったが、表向きは朱雀院出家のための処置ということであった、紫自身、「あはれなる御譲りにこそはあなれ」と健気な諦めを示すのではあったが、その心の底には、「ただならぬ」動揺が圧えきれなかった。権勢の後盾もなく、むしろそれも入らぬこととして「ただ人一人の御もてなし」光る君の愛情を一筋の頼みとして存在しえた紫にとって、光る君との愛情の糸が、分けられるものとして受けとらねばならぬ事態を意識したとき、その生の根底からゆり動かされざるをえなかった。光る君に、益々いとしい存在であると慰められ、それも真実でないことはないという証処を握っても、具体的な事実は重圧となった。女三宮の所にゆく光る君を見送っては、「あじきなくもあるかな」という歎きをもつ紫は、やがて愛情の彼方に、永遠なものを求める姿勢へと進んでいった。「『この世はかばかり』と見果て」て、来世への準備としての出家を願い出る様になったのである。この、自己の運命をそれまでと見極めることによって、来世への準備に切換えるという思考については、かつて論集に述べたものがあるのでそれについてみられたい。（論集第16巻第1号源氏物語の仏教的要素―源氏物語はこの世をどう考えているか―昭和40年9月）

問題を内包しながらも六条院の平和が保たれていた最後の華やかな行事、「女楽」の後で、生涯を回顧して、光る君と紫とがしみじみ語らう場面がある。

「君の御身には、かの、ひとふしの別れより、あなたこなた、物思ひとて、心乱り給ふ許のことあらじ」となん思ふ。后といひ、ましてそれよりつぎつぎは、やむごとなき人といへど、みな、かならず、安からぬ物思ひ深きわざなり。たかきまじらひにつけても、心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬも、やすげなきを、親の窓の内ながら、すぐし給へるやうなる、心安きことはなし。「その方、人にすぐれたりける宿世」とはおぼし知るや。思ひのほかに、この宮の、かく、わたり物し給へるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加はる心ざしの程を、御身づからの上なれば、思し知らずやあらむ。物の心も、ふかく知り給ふめれば、「さりとも」となむ思ふ。（若菜 下）

光る君自らの生涯回顧のあとに語りかけた言葉である。紫は次の様に答えている。

の給ふやうに物はかなき身には、過ぎにたる、よその思えはあらめど、心に堪へぬ物嘆かしさのみ、うち添ふや、さは、みづからのいのりなりける

(若菜下)

そして再び出家の願を提出している。引用の答えにみえる、「心に堪へぬ」以下の告白、この解釈はいろいろあろうが、自分の運命の欠けを自覚して、それゆえに祈りの心を養われ、慎しみのうちに過して来たという表現には何と深いものがあるだろう。祈りという言葉、現世利益の加持祈祷の意味にしか殆ど用いていないこの時代に、こういう意味で「祈り」という言葉を用いている精神に注意を喚起したいと思うが、今はそこに止っておられないので先に進むことにしよう。

紫の出家の願は、光る君によって聞き届けられなかった。許されぬことを我が御身をも「罪軽かるまじきにや」とうしろめたく思されけり(御法)と心に秘めて死んでゆく。

紫を先立てた光る君は、御法、幻の巻に、再度しみじみとした生涯回顧の感慨を吐露しているが、今は繁雑をさけて、幻の巻のそれを紹介するに止めよう。

この世につけては、飽かず思ふべきこと、をさをさあるまじう高き身には生れながら又「人よりも殊に口惜しき契りにもありけるかな」と思ふ事絶えず、世の、はかなく憂きを知らずべく、仏などのおきて給へる身なるべし。それをしひて、知らず顔にながらふれば、かく、今はの夕べ近き末にいみじき、事の閉ぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も、残りなく見果てて、心安きに、いまなん露のほだしなくなりたるを(幻)光る君は、ここで、恵まれた生を享けたにも拘わらず、それだけにまた人よりも残念に思う運命を経験したことを述べ、その運命を通して仏が永遠への導きを用意してくれたのに素直に受けなかったために、この晩年に、決定的な打撃としての紫の死を経験させられた。ここではっきりと、自分の運命も心情の限界も残りなく見果てることが出来たので、安心して出家出来る身になったと、自覚し、身構えている姿を示している。そうして、この後、六条院の夫人達に、最後の訪問をするのであるが、紫の願を押止めた時には、出家した以上は、お勤めをする山さえも別々にと厳しく考えるゆえに、病弱になった紫を、そうさせることは出来ない、というようなことといったにも拘らず、明石君との会話では、同じような慎重論をもって止めようとする明石君に、きっぱりと次の様に云い切っている。

さまで思ひのどめん心深さこそ、浅きに劣りぬべけれ (御法)

御法の巻で、紫亡き後の一年を過した光る君は、その年末の行事を終えて姿

を消し、雲隠巻となる。その後については、宿木巻に

故院の亡せ給ひて後、二三年ばかりの末に、世を背き給ひし嵯峨院にもとあるので、出家して嵯峨院にあり、二三年の勤行の後に、亡くなったものと考えてよいであろう。

2

物語の中で、ある程度の自覚をもって出家し、出家した後の心境まで伺うことが出来るように扱われているのは、浮舟である。宇治十帖宿木巻辺りから出現し、物語の最後の巻、夢浮橋まで、中心的人物として描かれている。薫の思い人として宇治に据えられれていたにも拘らず、匂宮の情熱にほだされて、ついに絶体絶命の立場に陥り、宇治川に投身しようとして果さず、横川の僧都に助けられて蘇生、叡山西の坂本、小野の里にある、僧都の妹尼の許に養われることになる。しかし、そこでもまた、尼君の今は亡き娘の婿、中将に心をかけられ、煩わしさに僧都に切に願って出家を決行したのであった。

浮舟を亡くした娘の身代りとして、長谷の観音の賜ったものとかしづく尼君が、お礼詣りに出かけた留守の間に、折から訪れて対面を追る中将を逃れて、夜半母尼の居室に、まんじりともせぬ一夜を明す浮舟は、自らの来し方を次の様に回想し、反省する。

昔よりの事を、まどろまれぬままに、常よりも思ひ続くるに、いと、心憂く、親と聞えけむ人の御かたちも、見たてまつらず、遙かなる東をかへるがへる、年月を、行きて、たまさかに、尋ね寄りて、「嬉し、頼もし」と思ひ聞えしはらからの御あたりも、思はずにてたえすぎ、さるかたに思ひ定め給ひし人につけて、やうやう身の憂さをも慰めつべき際目に浅ましく、もてそこなひたる身を、「思ひて行けば、宮を少しも『あはれ』と思ひ聞えける心ぞ、いと怪しからぬ。ただ、『その人の御ゆかりに、さすらへぬるぞ』と、思へば『小島の色』をためしに、契り給ひしを、などて『をかし』と思ひ聞えけむ」とこよなく飽きにたる心地す。(手習)

そうして、折から、一品宮の加持のために下山し、小野に立寄った僧都に切願して、その場で出家をとげたのである。その心境は、次のように叙されている。

なほ、ただ今は心安く、うれし。『世に経べきもの』とは思ひかけずなり

ぬるこそは、いと、めでたきことなれと胸のあきたる心地ぞし給ひける。

(手習)

日頃、たゆみなく結ばほれ、物をのみ思したりしも、この本意の事し給ひて後より、すこし、はればれしくなりて、尼君と、はかなく、戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ、明かし暮らし給ふ。行ひもいとよくして、法花経は更なり、異法文なども、いと、多く読み給ふ。

(手習)

その半生の回顧、反省、そして出家後の心境、一応、しかと手應えのある扱われかたをしているのである。しかし、やがて、その生存を知った薫が、僧都を訪れてたしかめ、浮舟の弟の小君を遣して、便りをもたらしした時、事情を知った僧都からの消息もあって、薫の許へ帰るようにとのすすめがあったにも拘らず

所違ひにもあらむに、いとかたはら痛かるべし

(夢浮橋)

と、尼君の差出す薫の手紙を拓いたまま差もどし「顔も引き入れて臥し給へり」という態度で終っているのである。出家後の清々しさを懇切に描かれた浮舟であるにも拘らず、最後の場面には、未だ、いささかの、固さが残っている。魂の父ともいうべき僧都に、答えられぬ姿を示しているのである。

一体、物語の中で、問題を感じて出家した人々の中で、どれ程の人が、本当に、往生をとげているであろうかと探ってみるに、その後の消息まで述べられていない様な扱いを受けている人物はいたし方ないこと、六条御息所は物怪となってなお苦悩を続けているし、藤壺のような人まで、光る君の夢に現れて、救われぬ苦悩を訴え、出家は果さなかったけれども、俗聖といわれて、宇治山の阿闍梨の指導のまにまに、行儀としての念仏さえ怠らなかった八宮が、やはり阿闍梨の夢に現れて成仏しえぬ悩みを訴えてその供養を頼んでいる。

3

物語には、唯一人であるけれども、最後に登場してきて、本当の宗教者として、捉われない態度で自由に振舞いうる人物が描かれている。浮舟を助けて蘇生させた、横川の僧都である。これが、いわゆる物語において造型された人物かと思われる程「仏の救い」ということに徹底した考えを持ち、また、実践する人物である（詳しくは、日本文学研究室発行、日本文学第21号、源

氏物語における仏教的要素—横川僧都—昭和38年10月号参照)

宇治の古院の荒れ果てた奥庭の木の許に、浮舟を見出したとき、長谷詣の帰途を発病し、もしものことを懸念されたために、僧都をも呼び下した母尼の本復が焦眉の問題であるとして、え体のしれぬものに拘つて、不吉の起ることをさけようと、この女性を助けることを極力拒んだ弟子の阿闍梨達に、敢然として目前の生命の尊ぶべきことと説いた言葉に、次のようにいっている。

まことに人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る棄てむこといみじきことなり。池に遊ぶ魚、山に啼く鹿をだに人にとらへられて死なむとするを見つつ、助けざらむはいと悲しかるべし、人の命ひさしかるまじきものなれど、残りの命一二日をも惜しまずばあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ人に逐はれ、人にはかりごたれても、これ横ざまの死にをすべきものにこそはあれ、仏の必ず救ひ給ふべき際なり、なほこころみにしばし湯を飲ませなどして助けこころみむ、つひに死なばいふかぎりにあらず (手習)

仏の救いを徹底させるためには、一步も譲らぬ厳しさをみせている。そうして、浮舟は助けられたのである。

しかし、その後も浮舟の容態ははかばかしくない。亡くした娘の代りに、大事にかしづこうとしている妹尼は、僧都に、下山して加持をしてくれるように頼む。浮舟との邂逅に意義を感じ、その安否を気遣う僧都は、尼君の願を容れて下山しようとするが、弟子達は、それを押し止める。その間の問答にも一貫した僧都の姿勢は、はっきりと打出されているのである。

いであなかま大徳たち、われ無漸の法師にて、忌むことの中に破る戒は多からめど、女の筋につけてまだ謗りをとらず、あやまつことなし、齢六十にあまりて、今更に人のもどき負はむは、さるべきにこそあらめ (手習) と決然と言つてのける。その心は

いとあやしきことかな、かくまでもありける人の命をやがてうち棄てましかば、さるべき契ありてこそはわれしも見つけけめ、こころみに、助け果てむかし、それに止まらずは業つきにけりと思はむ (手習)
と一つの使命感をもって、答えているのであった。

弟子達も黙ってはいなかった。若い女性を助けるために、自らの山籠りの禁を破って、下山して修法するなどということは、それはまず、外聞が悪いということで、人聞きも憚られる。そういう理由で止めた。しかし、それが聞かれなかったのが、今後は大問題をもちかけて、止めようとしたのである。

よからぬ人の、ものをびんなく言ひなし侍る時には、仏法の瑕となり侍ることなり (手習)

僧都個人の外聞として、人に「もどかれる」などということではない。口さがない人に、強いてこじつけられれば、「仏法の瑕になる」というのである。仏教の躓きになる…僧都たるもの、いくら慎重にしても、しすぎることはないのである。

僧都にとっては、女性であれ、男性であれ、一と度自分との関りをもったその生命を完うさせうるか否かが問題であった。そうして、加持によって完うさせようという決断をもった時、何物をも顧慮することは必要ではなかった。この場合、仏法の躓きになるということさえ、信仰者を卑法にする口実にすぎないと考えられたのであろう。僧都の、この信念の前に、物怪は見事に退散させられ、修法は成就したのであった。

もっとも、僧都にしても、絶対の自信などがあるものではなかった。

「この修法の程にしるし見えずば」といみじきことども誓ひ給ひて

(手習)

といわれているように、切願をもって、自分のすべてをかけていたのである。

時間の省略のために、ほんの僅かにしかふれえないが、このように、仏の救い—それは身体的にも精神的にも—のためには、凡ゆる障害をも乗り越えて、決断を下し、実行に移す人であった。

僧都の、仏者としての造型は、母尼の旅の途での病の加持のために、また一品宮の病の加持のために、下山する姿を、また、蘇生させた浮舟のことについても、絶えず配慮していて、小野の里に立寄る時には必ずこれを見舞うとか、また、その時出家の願を持出されて当惑しつつも、細かな配慮をもって、とうとうそれを断行させるなど、細々とした愛情をもって、一と度関りをもったすべての生をいとほしむ姿を、浮彫りにされている。

最後に、いろいろな経緯を経て、先にもふれたように、浮舟が薫の思い人であることが知れ、横川を訪れた薫に、浮舟への再会の手引を頼まれると、一緒に山を下りることは断るが、案内の手紙を浮舟によせる。それには、「事情を知らずに出家させたが、事柄を知るにつけても、此の度は薫の許へ帰るべきだと思う。出家の功德は限りないものがある。一と度出家したものの自覚をもって、慎しみを忘れず、今は、薫の許へ帰るように」という、意味合いのことが書かれているのであった。(この消息文の解釈については、議論もある所で、詳しくは東京女子大学五十周年記念論集、日本文学篇、源

氏物語における仏教的要素—横川僧都消息の解釈について—昭和43年10月参照)

手づから出家させた僧都が、出家した浮舟に、もう一度薫の許へ帰るよう
にということは、もしも、これを、本気で、前向きでいっているとすれば、
大変な勇気と決断のいることである。それこそ「仏法の瑕」になりかねない
大問題である。今、十分な説明なしにこのようにいうことは慎しみたいが、
述べかけたことであるからいってしまうならば、僧都の配慮においては、い
ずれ、薫ともども、相携えて仏道を歩む決断の時が来ることと期待しての言、
(処置)と読みとるが—それは、薫との対面において薫から僧都の感じ取り
うるものであることを付言しておく—浮舟は、僧都の指示した高みには到達
出来ないものとして、身を固くして薫の手紙を固辞し、泣伏してしまうので
あった。このことは前述した通りである。私は、僧都のこのような姿勢にお
いて、作者の仏教観の最高の境地を伺いうるものと思うものである。

以上物語に添って、「あはれ」の世界から、それを越える世界へと志向しして
いる人々の姿、そこに様々の問題のあることをみてきた。なお、ここで、「あ
はれ」否定の端的な表現を、もう一度、念のため、つけ加えておこうと思うが
それは、先にあげた、光る君の、生涯回顧のあとに続く部分と、浮舟の、あ
の、まんじりともしなかった夜の反省の、あとに続く部分とにあるものであ
る。

…今なん露のほだしなくなりたるを、これかれ、かくてありしよりけに、
目馴らす人々の「今は」とて行き別れむほどこそ、いま一きはの心乱れぬべ
けれ。いとかなしかし。わろかりける心の程かな (幻)
紫上を先立てて、今はもう何のほだしもない筈なのに、昔から身边に召使っ
た、親しい女房達との別れが、心を乱すけれども、その「あはれ」に対して
「わろかりける心の程かな」と、いいえているのである。また、その後のこ
とであるが、明石君を訪うて、しみじみと物語るところでも

人を「あはれ」と心とどめんは「いとわろかるべき事」といにしへより思
ほへて

といっている。これも昔のことをいっているのであるが、今だからいえるこ
とではあるのである。

浮舟の場合は、情熱的な匂宮を

宮を少しも「あはれ」と思ひ聞えける心ぞ、いと怪しからぬ (手習)

といい、すでに引用した部分にも、はっきり示されているのであるが、そのあと、その句宮に比べて、おだやかな薫の人となり慕わしく思い返し
さすがに『この世にはありし御様をよそながらだにいつかは見んとする』
とうち思ふ

その「あはれ」に対して、すぐに打消すべく

「なほ悪の心や、かくだに思はじ」など心一つをかへさふ (手習)
と叙されているのである。

このように、あはれ否定の姿は、はっきりと示されているにも拘らず
出家しえない姿 (出家させない姿)

出家しても本当に往生、成仏出来ない姿
を描き、そして同時に一方では、徹底した理想的な仏者の姿をも描いている
のである。

一体これはどういように理解すべきであろうか。それは、紫式部の告白
の中から、解釈の緒がつかめないであろうか。探ってみようと思う。

4

家集にある、廿才代の頃と思われるもので、父の任国に伴われた越中からの
帰京の途次と解される歌に、次のようなものがある。

率堵婆の年経たるが転びたふれつつ人に踏まるるを
と詞書して

心あてにあなかたじけな苔むせる仏の御顔そとは見えねど
というのである。前後の歌の詞書で、都への道中であることが知れ、旅の興
趣のようなものを詠んでいるのに続いていることから、そしてまた、「そとは
(それとは)」に「そとば」が詠みこんである技功的なところもあることな
どから、「人に踏まれる率堵婆を見て興じつつ」と解する人もあるようであ
るが、私にはそうは思われない。むしろ、仏を象徴する率堵婆に対する敬虔
な思いを、読み取るべきではないかと考えている。仏の御顔、それとはつき
り見えないけれど、苔むせる率堵婆、それは、かたじけない仏の象徴である。
それが、人に踏まれているなんてとんでもないことであるのに、という感慨
であると思う。むしろ慨嘆しているのではないかとさえ、思われる。宗教的
なものに対する、敬愛な態度をよみとりうらと思うのである。

また、日記をみると、有名な書き出しの所にある、反省的な、自己凝視の心を述べた辺りが注目される。寛弘5年7月中旬頃の条、

秋のけはひ立つままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし……………

うき世のなぐさめには、かかる、御前をこそたづねまゐるべかりけれど

うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき
といて、現実の自己の運命に対して、醒めた心でいるべきであるのに、ま
のあたりみるめでたさに押流されてしまいそうな自分を、酷しく、反省して
いるのである。

こういう、形而下の世界だけではない、見えぬ世界にかけて、ものを思ふ
態度を、いつも自分に課している姿をみることが出来るわけである。こうい
う自覚を、繰返し繰返し記されたあとに、それは寛弘6年の記事につづくの
くのであるが、出家への姿勢を示した次の個所が注目されるのである。

いかにいまは言忌みし侍らじ、人といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏
にたゆみなく経をならひ侍らむ、世の厭はしきことはすべて露ばかりも心
もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、解怠すべうも侍らず、ただ、
ひたみちに、そむきて、雲にのぼらぬ程のたゆたふべきやうなむ侍るべ
かなる。それにやすらひ侍るなり。年もはたよきほどになりもてまかる。

いたう、これより老いぼれて、はためづらにぞ経よまず心もいとどたゆさ
まさり侍らむものを、心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかる
かたをぞ思ひ給ふる。それ罪ふかき人は、また、かならずしもかなひ侍ら

じ、さきの世しらるることのみおほく侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。
以上の述懐について、どのように解すべきであらうか。人は、この個所を引
いて、出家を肯定し、自らも決行しようと思うけれど、やはり、「あはれ」の世
界にひかれて、ひきもどされてしまう、そういう心境だとする。そうして、
紫式部は、やはり、文学の人、「あはれ」を是とする人であって、仏教的な信仰
への決断をあきらめたとするのである。物語が、「あはれ」の文学であるという
のと同時に、作者自身も「あはれ」に止った人であるとするのである。

右の様な結論に対して、私は疑問をもつ。そして、次の様に考えるのであ
る。出家への姿勢としては、冒頭で一応の決断に到着していることを示して
いる。しかし、出家しても、往生するまでの間の生の不安定さ、そこに問題
を残して、躊躇しているのである。しかし、そうはいっても、年令的にいっ
ても、すでに時が迫っている。慎重を期するようなことをいっていて、お勤
めも出来ないようになってはおしまいである。けれども、こう決行出来ない

のは、あるいは前世の罪が深すぎて、出家が出来ないのかもしれない。考えてみれば、前の世もよくなかったに違いないことには、この世でも不幸なことがばかりだったと解されるように思う。(前世、現世、後世について、こういう考え方をすることについては、東京女子大学学会発行 論集 第16巻 第1号、源氏物語における仏教的要素—源氏物語はこの世をどう考えている—1965年9月 参照)

決断しては引き戻され、決断しようとしては躊躇され、前世の因の至らなさまで思って思い悩む、全体的に、暗い、閉された心の状態を述懐しているようであるが、後半は、どちらかというと、もしやという疑念であってついたり解される。私は始め、紫上の晩年の心境で、出家を願っても願っても許されないのに対して

我が御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり (御法) と、思いに沈むところを注意しておいたけれど、作者のこの場合の心境と、全く同じであることを興味深く思う。こういう考え方については、紫式部の仏教的教養に関係があるのであって、そのことについてもふれたいのであるが、今は時間の関係で割愛しなければならない。

私がここで特に注意したいのは、前半の後部

ただひたみちに、そむきても、雲にのぼらぬ程のたゆたふべきやうなむはべるべかなる

である。三世因果の考方でいくなれば、この世において、生れ難き人間として生れ、遇い難き仏法にめぐりあって、証覚の道を教えられたならば、決断して、六道輪廻の道と決別し、永遠への新生をかちとらねばならない。それには、この世で修証菩提—成仏—を完成するのが本来であるけれども、もしそれが叶わない凡夫と自覚するならば、阿弥陀仏の悲願にすがって、その極楽浄土に、往生し、水草清きより恵まれた雑音の入らぬ所で、成仏することを心掛けるべきである。その為には出家し、境を浄めて念仏に励むべきであった。出家は往生成仏の道程である。源氏物語の背景として、この程度までに進んできていたのが当時の仏教であった。(この辺りのことに関しては、紫式部学会発行 むらさき第5号 源氏物語と往生要集参照)

往生要集に代表される当時の浄土教的思考において、平安中期以後、末法思想、摂関政治の軋轢からの社会不安に足をすくわれた貴族達は、願生浄土の思想、専ら自己の救い、自分が浄土に生れる為にのみ勤行をするようになる。そして、九品蓮台というような浄土のイメージに対して、よりよき浄土

に生れることが、物質的により多く、より立派な供養をすることによって報いられると考えるようになる。造仏、造塔、写経その他の供養は本来は伝道のためのものであった筈である。自らの勤行も、往生も仏道の証しである筈である。慶滋保胤の「本朝往生伝」というようなものも、証しとして意味があるのであったけれども、当時の貴族一般の仏道修行ということは、自分がよりよく救われる為にというように変貌して来ている。先に、冒頭でいささかふれた道長の往生の叙述なども、その好例である。自分のみがよりよく救われるためにと変貌して来る時は、出家後の勤行は、生ける屍の姿である。俗世であせくと自己中心に生きることは、救われない姿である。けれども出家して、自己のためのみ後世を求める姿は、一段と救われない姿である。「雲にのぼらぬ程のたゆたふべきやう」は、その生の空白の時として、紫式部は受け取っているのではないであろうか。それは墮落変容して土着した貴族仏教の欠陥を鋭く見定めたものとして、その絶望の歎息であるとみるものである。

一方 専門家の僧侶には違う生き方があった。専門家の僧侶といっても、すべてがすべてではないが、中には、出家した時から、生の充実が始まる者があった筈である。自らの修証菩提のための修行はもとより、それを一つの証しとして進むのと同時に、伝道の仕事がある。貴族の利己主義に使われて現世の利益のために曳きまわされる者はとにかく、横川の僧都のように、すべて自分と関ってくるものの生命を助けて完うさせるということ、そうした前向きの生が、生きられていたのである。朝廷の召にも、藤原氏の請にも応じず仏の救の成就にのみとりくんだ、奇行の人として、相応和尚（叡山無動寺）とか、増賀聖（大和多武峯）性空上人（幡磨書宇山）など、奇行の人として有名な人々が当時にも実在していたのであった。横川僧都は、その造型を辿ってみた限りでは、仏教の宗教としての真髄を示しえた人と考えてよいであろう。物語の中では横川僧都ほど捉われない自由をもった人物は一人もいない。殆んどが出家に際して涙多く別離を悲しむ姿、出家しても一つの執著のために成仏出来ず、人の夢に現れて供養を頼む姿を示している。

紫式部はひと度は離脱すべきものとして、この世のあはれの世界をひたと見すえていた。けれども、作者が、そこに身を置いた貴族の仏教において、本当の救として働く姿を、見ることが出来なかったのではあるまいか。

俗世の生活、そこにはまだ、俗ながらの倫理がある。出家して、往生する迄の生が宗教本来の緊張を失ってしまったものであるならば、その空白は耐えられないものである。紫式部に凝視され、批判されたものは、この無内

容の生であったのではなからうか。

次の言葉は、今の場合、そのままびったりあてはまるものかどうか疑問もなくはないが、最近耳にして忘れられないものである。「よく生きた者こそ、よく死ぬことが出来る」。ここでいうならば、本来の宗教性をもったものとして、貴族の出家姿が、よく生きる姿を示しえていなかった事に問題があるのだと思う。

今から丁度千年前に生れて、当時の知識階級としての中流貴族の娘であった紫式部は、せいぜい開かれても女房生活としての活動しか許されないような閉された社会にあって、私的生活も幸せであったともいいかねる。そして最も多く考えても45才という長いとはいえぬ生涯を送ったのにすぎなかった。けれども、その眼は人の世の問題の基底にそそがれ、現象的には、男女間の愛情の問題を対象としたにも拘らず、その根底にある人間存在の重大な問題をさぐりえて、これととりくんでいたのであった。そのことに深い畏敬の念をもって見つめているものである。

1970・10・11